



#06

クール・クール・ビューティー



著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

◆ 美紅 SIDE

しゅっしゅっと音を立ててストーブの上のヤカンから、規則正しく蒸気が噴き出している。冬の乾いた部室にはちょうど良い加湿、そして暖房だ。

あたしは今、絵を描いている。

静物の油絵だ。

リンゴとバナナと そしてなぜかきゅうり。

取り合わせはおかしいけれど、赤、黄、緑と配色のバランスは良い。

何の変哲もないこうした果物が、毎日表情を変えていることを知ったのは、この西陵女子高校の美術部に入つてからだ。

絵を描くのは楽しい。

いつまでも線を引いていたい。

いつまでも色を重ねていたい。

彼らの表情をすべてキャンバスに定着させたい。

絵を描くのはとても楽しい。

でも。

そこであたしの筆は止まる。

そしてそつと横目で葬先輩の様子を窺う。

あたしの隣で黙々と筆を動かす先輩はいつもの鋭い眼光で対象を見据えている。

まるで相手の細胞のひとつひとつ、DNAのひとつひとつさえも見逃さないというくらいに。その真剣な表情は他を寄せ付けない何か莊厳なものを持っていた、あたしは軽く身震いする。真剣な先輩は素敵だけど、ちょっと…うん 正直言つてかなり怖い。何があたしがほんの少し…ほんの少し粗相をしただけで、先輩の絵も、先輩自身も壊れてしまいそうな、そんな危ういバランスの上に、緻密さと脆さを併せ持つた完全さがあるような気がしたから……。

そしてその先輩とあたしは今、どうしたわけか、たつた二人っきりで黙々と絵を描いているの！

久美子は今日、風邪で休んでいるからいなのは当然としても、りつちゃんとまる子ちゃん

もいなのははどうして？

山崎先輩も、遠藤先輩も、お昼に学食で普通に見かけたのに……。

どうしよう。

どうしよう。

葵先輩を見るたびに動悸^{どうき}がして筆が震える。これじゃまるで蛇^{へび}に睨^{にら}まれたカエルのよう。

このままじゃ……。

このままじゃ……。

ああん、もう誰でもいいから早く来てーー！

◆葵 SIDE

わたしは今すごい怖い顔をして絵を描いている。

判つてる。

判つてる。

判つてる。

判つてる、けど。

どうしようもないのよおおおおお！

だ、だつて憧^{あこが}れの美紅ちゃんがすぐ隣にいるんだよ!!
二人つきりなんだよ!!

緊張しちゃうんだもん！

緊張するとすぐ顔に出ちゃうんだもん、わたし！ 自分じやどうしようもないんだもおおおおん！

4月に入部してきたときからずっと気になつてたんだよ、美紅ちゃん。

くりくりした愛らしい瞳^{ひとみ}、透き通るような白い肌。アクセサリーみたいな耳、ちょっと小さいくれどすっと通った鼻梁^{ひりょう}、ほんのりと桜色^{さくらいろ}に染まつた唇^{くちびる}。そして腰までとく黒髪^{くろぱ}……全部わたしの理想なんだもん！ ほんとに理想が全部具現化されて目の前にあるんだもん！

これで緊張するなっていう方が無理だよおおおおお！

……どうしよう。美紅ちゃん、絶対怖がつてるよね？

何か言って場を和ませたほうがいいよね？

このままじやわたし、ただの無愛想で怖いだけの女だもんね？

でも。

でも。

何にも思い浮かばないのよおおおお！

天気の話なんて平凡だし、なにより「そうですね、ずっと雪ですね」の一言で会話が終わっちゃいそうだし……。そうだ！ 美紅ちゃんの趣味の話をすればいいんじゃない？ 美紅ちゃんの趣味、趣味……そうだ、美紅ちゃん油絵が好きだつて言つてたじゃない！ ジヤア、その話をすればつて今油絵描いてるじゃないのよおおお！ これじゃまるでカレーを食べながらカレーの話をしてるようなもんじやない!? って全然違う？ つていうか別に問題ないんじやない？ あれ？ あたしいま何を考えたんだっけ？ インド人もびっくり？ ジヤなかつた、

インド人を右へ？ でもなかつた！ もお、自分でも何考えてるか判らないわあああ！

いやあああー、もう山崎でも遠藤でもいいから早く誰か来てえええええ！ 助けてえええ！

◆美紅SIDE

どうしよう。
どうしよう。

なんか葵先輩、小刻みに震えてるんだけど……？
気がつかないうちにあたし、何かしちゃったのかしら？

どうしよう。
どうしよう。

し……。

どうしよう。
どうしよう。

その時不意にあたしの目に、葵先輩の筆先にある「異物」が飛び込んできた。
魔が差す、って本当にあるんだなってこの時初めて知った。
だつて次の瞬間、なんの躊躇もなく、あたしは言ってしまったんだもの……。

◆葵SIDE

「先輩、きゅうりがメロンになつてますけど……?」

初めて美紅ちゃんから話しかけられた！ ひやつほー！ と思つたら……。
改めて自分の描いてる物を凝視する。
リンゴと、バナナと、……メロン。

ほんとだ、わたしメロン描いてる!!

美紅ちゃんと一人きりになつたことでテンパつて自分でもいつ描いたか判らないわ……。

どどどどどうしよう。

中身はともかく、一応外見上はクール・ビューティーで通つてる（はずだ）から、それ相応の対応をしなくちゃだよね……？

でもこんな時、何を言えばいいの？ どうすればクール・ビューティーらしいの？ いつもなら黙つて頷いたり首をちょっと横に振つたりするだけ、だいたいの事は済んでたから、こんな時どうすればいいのか全然判らないよ!? 基本あたし口下手だし！ 気の利いたことなんて言えないし！

……魔が差す、って本当にあるんだなってこの時初めて知った。

もの……。

◆美紅SIDE

「はちみつ！」

「はちみつ？」

真剣な表情で応えてくれた葵先輩の言葉は、しかしあたしの理解の範疇^{はんちゅう}を超えたものだった。はちみつ？

はちみつって……あの甘い？ ホットケーキにかける？ 何かの謎かけかしら？

葵先輩、すごい真剣な表情でこっちを見てるんだけど……？ もしかしてはちみつにまつわる名画とかの話かしら？ はちみつの名画……ああん、だめ、全然思い浮かばない！ こんな時、自分の知識の浅さに本当に愕然とするわ……。

でもどうしよう。このまま何も応えないと、すごい気まずいし……。

何か気の利いた応え……。

何か気の利いた応え……。

ああん、神様！

その時、葵先輩が静かに言葉を接いだ。

◆葵SIDE

「そう、きゅうりにはちみつをかけるとメロン味になるのよ。だからメロンなのよ！」

……我ながら支離滅裂^{しりめつれつ}だわ……。

目の前で美紅ちゃんがぽかーんとした表情でわたしを見つめている。
そりやそうだわ、あたしだって同じこと言われたらぽかーんとするわ、呆然^{ぼうぜん}とするわ……。

「だから美紅ちゃんもはちみつを描くといいよ！」

口よ！

恥ずかしい！

穴がなかつたら掘りたい！ 掘つても入りたい！

もうやだ！

もうやだよううううー！

◆美紅SIDE

……やっぱり葵先輩つてすごい。

あたしは改めて先輩の偉大さに、畏敬の念を強くする。

見ていないようで、先輩、ずっとあたしのこと見ててくれたんだ……！

そう、あたし、静物はだいぶ描けるようになってきたんだけど、流体……特に液体ってまだどう描けばいいのか全然判つてない。この前も一日かけて近くの川で写生してみたんだけど、清らかに流れる水の躍動感が少しも表現できなかつた。悔しかつた。

でも、はちみつなら！

半液体状で水みたいにすぐに形が変わらないから、その分ゆつくり観察できる……！
まずははちみつから始めてみなさい、つてことなんですね、先輩……！
先輩つて、やっぱりすごいです！

◆葵SIDE

……なんだろう、美紅ちゃんがすごいキラキラした瞳でわたしを見ているんだけ……？

「葵先輩、ありがとうございます！」

「え？ ……あ、ううん、それほどでもないわ」

「あたし、はちみつ描きます！」

「うん、はちみつ描……ええつ？！」

「はいはいはい、それ以上やつたら犯罪だよーすとつぶーすとおーつぶ」
 突然部室のドアががらりとあいて、山崎先輩と遠藤先輩が楽しそうに笑いながら入ってきた。
 「ややややや山崎先輩!?

「いやー、面白いもんが観れたわねー、美智子?」

「そうだなー。こんなにテンパった葵見たのは小学校以来だなー」

今の流れでどうしてそういうことになつたんだろう？ どう考えても「『はちみつ』ってなんですか？ 葵先輩、熱でもあるんじゃないですか？」の流れでしょう、今は!?

ああ、もうだめ。判んない。

美紅ちゃんが何を考えてるかも、自分が何を考えてるかも。

何か恵熱を通り越して、目眩めまいがしてきたわ……。

あ……。

◆美紅SIDE

突然ぐらりと傾いた先輩を、あたしはあわてて抱きとめる。

何!! 何が起こつたの!!

あたしの腕の中にいる葵先輩は思つたよりも華奢で、まるで日本人形のように肌が白くきめ細かい。

潤んだ瞳と、かすかに漏れる吐息に、鼓動こどうがシンクロする。まるで世界に葵先輩とあたししか存在しないかのように。とくん、とくん、と……。

あ、先輩、すごい熱い……。先輩もしかしてすごい熱出してるんじや……。

無意識のうちにあたしは自分の額ひたいを、葵先輩のそれに重ねていた。じんわりと熱を帯びた肌が、微まかに震えている。葵先輩は瞳を閉じて、そしてあたしも静かに瞳を閉じて、そつと……。

「あ、あの、いつから観てたんですか!?

「いつからって……最初から?」

「葵とあんたが一人でじーっと絵え描いてるからさ、絶対なんかあると思ってそこで観てたんだw」

「いやー、予想以上に面白かったな」

「うん、葵の涙なんて久しぶりに見たよ」

いつの間にか目を見開いた葵先輩が真っ赤な顔で山崎先輩と遠藤先輩を睨んでいる。

「いやーテンパつてたね、葵」

「ほんとテンパつてたねー、葵」

「『きみもはちみつを描くといいよ(セイヨウ)』」

「あーはつはつはつは、くくくく……」

葵先輩の物真似をする遠藤先輩を見て、山崎先輩がばんばんとイーゼルを叩いて笑い転げている。

「お、お前ら……」

「お?」

「葵ちゃん、もしかして怒った? だめだよ、クールビューティはいつも沈着冷静でいいな・

く・ちや・ね★」

「こーろーす!!」

「きやー、こわーい♪」

「逃げろー♪」

きやらきやらと黄色い笑い声を残して山崎先輩と遠藤先輩が廊下(ろうか)へ飛び出していく。それを猛スピードで追いかける葵先輩。

テンパつてたつて……?

もしかして葵先輩、あたしのこと……?

ううん そんなことないよね。

でもなんだかちょっと嬉しいのは気のせいかな?

中庭には遠藤先輩と山崎先輩に物凄い勢いで雪玉を投げている葵先輩の姿が見えた。なんだか楽しそうだからあたしも参加してこようかな♪